
色情の息子

越本いつき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

色情の息子

【Zコード】

Z5548D

【作者名】

越本いつき

【あらすじ】

ポルノ映画館の館長を父に持つ主人公。父の遺品を整理する中で見付けたもの、それは？

scene1（前書き）

この小説には、内容に性的なものが含まれています。ご注意ください。

「有ちゃんあ～ん、このアナルバイブ、最高よー。アナタも使ってみるの?」

「おい、オナホール徳用三十個パック、まだ未開封だぜ。高校生の有には、やっぱつこれだろ」

「山下さん、街山さん、無駄口たたいてないで、それと並付けてください」

夕暮れ間近な、黄昏時。世間では家路につく子供や、夕食の支度をする母親たちの、あたたかな光景が繰り広げられているのに、僕は二人のゲイと一緒に、狭くて臭い部屋の中を片付けていた。

「まあ、有ちゃん！　あなた、思い出に浸る感傷とか、持ち合わせてないの？」

「アナルバイブに思い出なんて、ありませんよ」

「有、それは言いすぎだろ。仮にも館長が、大切に使い込んでたものなんだからよ」

「ナルバイブを百五十本使いこなす父親が、世間一般のどこのいるっていうんですか」

「有ちゃんあ～ん！？　あんなに立派な館長のことを、なんてまあー！」

僕は無視して、作業に戻った。目の前にある、等身大リアルオナ

ドール・彩ちゃんの身体を折り曲げ、強引にダンボールに詰め込み、ガムテで厳重に封印した。このままで、ビリの「」業者にも出せない。

「しかし、このコレクション、俺からすれば垂涎ものだぜ。有、これ本当に全部捨てちまつのか？」

「欲しければ、勝手に持つて行つてください。でも今日中に、全部片付けてくださいよ」

「有ちゃん、街山ちゃんが言いたいのはね、そういうことじゃなくて……」

山下さんが、丸っこい身体を、僕のすぐ隣まで寄せて、耳元でささやいた。

「これ、館長……いえ、あなたのお父様の遺品なのよ？ ほんとこ、何も持つていかないの？」

父は、ミーシアター『色情会館』^{じきじょううかいかん}の館長だった。このせの二階にある、事務所兼倉庫兼父の部屋。僕たちはこじり、遺品の片付けをしていた。

旅先のススキノから訃報が届いたのは、一ヶ月前。葬儀も埋葬も終えて、あとはこの映画館を閉めるだけになっていた。

僕は床に落ちていたペニスリングを拾い、見つめてみた。一体、これのどこが大切なのだか、全く理解できない。

「全部、僕にとつては『』ですか？」

顔も合わせないまま、山下さんに言ひつと、彼（彼女）は小さく肩を落とし、ナルバイン百五十本のもとへ戻つていった。

この映画館を閉める作業が終われば、僕は母方の叔母のもとへ引き取られることになつていた。高校を卒業して、就職するまで、といつ条件だけれど。もちろん叔母は、全くの堅気な人だ。

そこへ、まちがつてペニスリングの一つでも持ち込んでしまったら、ただでさえ肩身の狭い上に、せらに冷たく白い目で見られてしまふだらう。

恥ま忌ましいもの。母もこいつたものや、色情会館で上映される類の映画、いわゆるポルノを、心底嫌っていた。理解しようなんて、するはずもなかつた。そして、僕が小さい頃に離婚した。幼い僕を置いて。

家庭崩壊の原因ともなつたこれひき、だから僕も当然、恥み嫌つていた。

「有ぢやあ～ん、あなた、転校するんでしょ？ だったらこれ、新しいクラスのみなさんに、ごあいさつで配つてみたらどう？」

山下さんは、抱えていた巨大なダンボールの中身を、僕に向かつて威勢よくぶちまたた。

大量の「コンドームが、ドザザザザ！」と、轟音と共に僕の頭上から振りかかり、雪崩のように襲つてきた。

「セーフ・セックス・ウイズ・コンドーム！ よー！」

「いやかに宣言する山下さんの声は、「ソードームに埋もれた僕の頭上を飛んでいた。

「しません、から……」

「ゴムの山から這い出た僕は、息も絶え絶えになりながら、山下さんの提案を拒否した。

できるわけがない。

僕は、通っている高校の中では、僕が色情会館の息子だといふことを、隠し通していた。

一年生の頃、クラスの大貫くんおおぬきが一度だけ、色情会館に上映作をこつそり見に来たことがあり、それがバレてクラス中が大さわぎになつた。

「大貫、色情行つたんだって?」「つか、通つてんだってよ!」「しかも週一で」「いや毎日!」「こないだ遅刻したの、色情行つてたんだろう絶対」「じゃ、あの早退も、色情行きだな」「最近なんて、学校休んでまで色情行つてるしな」「休みすぎだろ、色情ハマリすぎヤバすぎ」「大貫退学? 色情に住んで完璧な変態になるんだろ」「

そうして、大貫くんは学校を去つた。

僕は、彼をかばつこともせず、息を殺すようにして、その騒ぎをただ見ていた。

僕のことだけに及ばず、人の人生まで狂わせる、父の仕事。色情

僕はそこから、必死で逃げて隠れるように生きてきたけれど、それももう、すぐ終わりだ。

新しい生活も、それはそれで窮屈なことになりそうだけど、これまでみたいに、うまくやつていけるはずだ。

息を殺して。

存在を殺して。

自分自身を、徹底的に殺して……。

気持ちが重く沈んできた。頭を切り替えよ。

まずは目の前の、膨大なやつらを片付けて。

僕が作業に集中しようとした、そんなとき。

「おい、これは！ 見てみろよ！－！」

「きやーっ、街山ちゃん、それすつごいお宝よ！ 有ちゃんも見て！」

一人の嬌声に、思わず振り向いた。

振り向いた僕の視線の先には、床一面に大人の玩具が散乱する中で、ピヨンピヨン跳ねる山下さんがいた。その横で、背の高い街山さんが、丸いケースを手にしている。

街山さんの手にあるもの。それは、一本のフィルムケースだった。

「街口さん、それは…………？」

僕は、街山さんが手にしているフィルムケースが、少し気になつた。

それは、おびただしい量のいかがわしいエログッズの中につつて、何だか異質に地味だったので、僕の目を引いたのだ。

「どうやら、見た感じでは館長の秘蔵ものらしいな」

手にしたケースを引っくり返したり、か細い照明にかざしたりしながら、街山さんが答えた。

古びたケースの表面には、タイトルも無く、埃まみれで汚れきっている。

「秘蔵中の... もやーつ... もやうお仕ね!」

山下さんは、浮かれ調子でくるくる回り、狭い部屋中の埃と、ニースカートの裾をまきあげている。

「それ、随分古いものみたいですけど」

「ああ。色情会館じや、最近はファイルムかけてなかつたからな」

映画館、と看板を掲げつつも、色情会館では、経営の苦しさもあり、最後のほうはほとんど、ビデオを上映していた。父は、独自の

ルートで入手してきた膨大な裏ものを、自身の手で編集してまとめ上げ、上映にかけていたのだ。けれども、その筋では、ビデオの選球眼が抜群に良いとかで、それなりに評判ではあった。

「ね、ね、これ、どうにかして見られない？ 街山ちゃん」

回転をやめた山下さんが、頬を赤く上氣させて聞いた。

街山さんは、固いケースの蓋をこじ開け、中のフィルムを慎重に取り出し、リールに巻かれた最初のほうを少し引き出して、光にかざした。

「つづむ、これはかなり傷んでる。まともに見るのは不可能だろ？ 仕方ないが、捨てるしかないな」

「やつ……。残念だわ」

街山さんの一言に、山下さんはガックリと深くうなだれた。先程の、ぐるぐる回っていた人とは思えないほど、しおらしくなっている。

山下さんの消沈で、今まで賑やかだった部屋の中が、一気に暗く沈んだ。

重い空気の中、僕は、街山さんの手にしたファイルムから、なぜか目を離すことができずにいた。そして胸の内に、ある迷いが生まれていた。

父の遺した、秘蔵のフィルム。

お世? いや、僕にとっては、単なる汚いフィルムだ。

けれどもね、このまま色情念體と共に、永遠に消えてしまひのか。

誰の皿にも触れず」。

そしてフィルムが消えれば、父の口とも完全に、僕の中から消えてしまひのだ。

……それで、いいのか?

……本当に、いいのか?

…………。

無意識だった。無意識のつま、言葉が、口をついで出た。

「でも、やつてみなもや、わからなこじやないですか」

その顔に、自分で驚いた。

街山さんと山下さんは、一瞬、虚をつかれたような顔をしたけれど、すぐに、一人顔を見合わせて、ニッコリ微笑んだ。

「そうだな、有。ものは試しだ。一度、映写機にかけてみるか

「有ちゃん! おつたか~ら、有ちゃん! おつたか~ら……」

元気に小踊りする山下さんを先頭に、僕たち三人は、一階の映写室へと向かつた。

小さな映画館の、ひとりわ小さな映写室。そこに、男三人がひしめいていた。

「街山ちゃん、私、何からしようかしら？」

「それじゃ山下、スクリーンの調整頼む。俺は映写機をセッティングするから」

人が三人もいれば、酸欠で息苦しくなるほど、小さな映写室。こんなに狭い中でも、二人は手際良く動いていた。映写技師の街山さんの指示の下、山下さんは準備を進めていく。僕は、ここで仕事をする一人を見るのは、初めてだった。

一人はずつと、父と共にこの色情会館を守ってきた。プライベートでの親交も厚い。

街山さんは、父が、全寮制の女子校に夜中、忍び込み、敷地内に建つ女子寮の白い外壁をスクリーンに仕立てて、『THE・援交女子校生』美少女性奴隸ハメ撮り百一十分一本勝負』をグリラ上映する、大変態行為をはたらいたときも、映写技師として父をサポートしていた。旧知の仲だから、共犯者として喜んで手を貸したそうだ。

街山さんは、フィルムケースからフィルムを取り出し、映写機にセットした。

「有ちゃん、あなたは席についてて」

山下さんに促されるまま、僕は、全部で三十脚の椅子が並ぶ客席に降り、ほぼ中央の硬いシートに腰掛けた。

やがて、場内の明かりがゆっくり落ち、後方の映写室から一筋の光が射して、スクリーンにカウントリーダーを浮かび上がらせる。

そして静かに、カウントダウンが始まった。5、4、3……

この瞬間は、自然と胸が高鳴る。

「さあ。始まるわ、館長の遺した映画。有ちゃん、シットバア～ツク、リラ～ツクス！」

カウントダウンは進む。

2、1
.....

scene 4

2、1

？？？

カウントダウンが終わり、本編とおぼしきものが始まつたけれど、目の前のスクリーンに何が映つてゐるのかは、全く判明できなかつた。

劣化したフィルム特有の、ざらついた質感の画面めいっぱいに、何かドス黒い、生き物めいたものが、ただうごめいてゐる。

しかし、映像が、極限の寄りから、微妙に引きになると、僕はついにその正体が、わかつてしまつた。

「マヤ～、ヴァラス！」

映写室の山下さんが、歓喜の声を上げる。

「私、大好きよ、こんな、こんな……」

山下さん、言わないで、僕、聞きたくな

「こんな……巨根……」

。

……。今、スクリーンに映し出されているのは、まぎれもな

く、いきり立つた男のドス黒い波動砲なのだ。

とんでもなく巨大な。

しかも無修正の。

生々しいそれは、さらに生々しくてやけに汁っぽいお相手と、ガチンコ勝負をいたしていた。

しかし、僕は……僕は、あえて言おう、僕は、まだリアルな女性経験がゼロなのだ。それどころか、異性の手を握ったことすら無いまま、ずっと純潔を貫き通している。

そんな人間が、大画面でモロに、完全無修正の黒アワビ姫ＶＳ黒い波動砲を目の当たりにしているのだ。

あまりのショックで、性的不能にでもなつたら、どうするんだ！？

状況処理能力が混迷し、座席で、凍り付いたように全身が固まってしまつたために、スクリーンから目を外そうとも外せない僕をよそに、山下さんは黄色い歎声をあげた。

「アーニー、ソラニアのマークがソラニア、あたしにも挿

その言葉を断つかのように、映像が切り変わった。

けれど、そこにはまた別の、大濡れアワビと肉欲バズーカの結合
シーンが、大映しになるのだった。

「おお、うれせ」

街山さんも、感嘆の声を上げる。

切り変わる映像。再び、結合場面。

切り変わる映像。再び結合。

結合。結合。結合……。

局部結合場面の連鎖は、幾度も、幾度も、限りなく続していく。

ノンストップで展開する、全力性交中の性器オムニバスムービーを、僕はただ、呆然として見ていた。

「ちよっと街山ちゃん、さつき映ったの、あの口のじやなかつた？
ほひ、あの、えつと」

「ああ、阿藤鷹だな」

「せうせうー。他にもいたわよ、懐かしいわあ～」

後方の映写室から、一人の話し声が聞こえる。

「鷹ちゃん、性技の帝王って呼ばれてたけど、実はオフじや、マイホームパパだったのよね～」

「そりだつたな。でも、女優を手マンで潮吹かせた直後、手も洗わず二歳の娘に電話するのは、どうだろつたな」

「あら、鷹ちゃん、仕事中なのについ、娘さんのことが恋しくなつちゃつたのよ～」

二人の和やかな談話とは対照的に、スクリーン上では相変わらず、激しい濡れ場が続行されていた。

「そりいや、鷹は」

あられもない映像を肴に、古きを懐かしむ話を楽しんでいたはずの街山さんは、なぜか突然、言いかけた言葉を飲み込んだ。まるで、不用意に禁忌にでも触れてしまったかのように。そして、次に迷いながら、言葉を継いだ。

「鷹は……」

「鷹はもう、死んじまつたんだよな」

街山さんは、喉の奥から低く、つぶやいた。

「そうね。でもほら見て、他にも懐かしい人が、いっぱいめいっぱい発奮してるわ！ チョコムース向ちゃん、飯島藍ちゃん、桃衣望ちゃん、カルーセル牧様、ボビー・フラナガンちゃん、倉尺七海ちゃん……」

性交中の局部部アップだけの映像から、映っているのが誰なのかを次々と言い当てる、山下さんの眼力と記憶力は、超人級だ。

「山下、ちょっと待て、それって全員ー！」

「わかつてゐるわ

一瞬にして、心が暗転したかのようなトーンになった山下さんは、胸に迫りくるものを押し殺すように、声をしぼり出した。

「ここに映つてるのはみんな、亡くなつた方ばかりよ

その山下さんの言葉は、今、上映されているフィルムの、真実の姿が何であるのかを、僕に伝えるものだった。

僕は気付いた。

次々と現れる、この世を去った者たちの生殖器が織り成す映像。

これは、スクリーンに投影された遺影なのだ。衆目の中にもぐるめく映り、そして消えていった、ポルノ界の人々の遺影。

そして長い沈黙の後、山下さんと街山さんは、とつとつと語り始めた。

スクリーンの中の、数えきれないほどの男たち、女たちのことを。

素人潮吹き百人斬りの企画ものを撮影後、精魂尽き果てたまま、明け方、家路につき、自宅前の道路で、抱き着いてこよなく飛び出してきた娘をかばい、暴走トラックにひかれた阿藤鷹。

アイドルポルノ女優として人気を博した後、テレビタレントや、実体験を元にした作品で小説家としても華々しく活躍するも、度を越した過労と度重なる心労で入院、誰もがその名前すら忘れ去ったころ、長きにわたり入院したまま、病床で生涯を終えた飯島藍。

究極のM男、ボビー・フラナガンは、五寸釘で自らの性器を板に打ち付けるなどのパフォーマンスを行い続けていたが、そのパフォーマンスの集大成として、ゴルゴタの丘で十字架にはりつけになり、ロンギヌスの槍で貫かれた傷口から大量出血したため、死に至った。

幾度となく性転換手術を繰り返し、男と女の間を渡り歩いたカルーセル牧は、絢爛豪華なレビューが売りのクラブで舞台に立ち、世を絶する美貌で称賛を浴びるが、自らのセクシュアリティの在り方に迷い続け、苦悩から逃れるように、自宅豪邸で一人、ヘロインに溺れ、違法薬物乱用の現場を摘発されて投獄、その獄中で自死した。

桃衣望は焼死体となつて産業廃棄物処理場で発見され、倉尺七海

は投身自殺、チョコムース向は……

二人の話が続く中、最大限のスケールで生殖行為を映写するフィルムはなおも、回り続けていた。

今、男のピストン運動は、限界を超えた速度に達しようとしている。

精力の限りを尽くす激しい映像と、死を語る一人の声との間で、僕は思った。

ここはまるで、葬送の世界だ。

そしてまた、一人の男が昇天した。

暗闇の中で唯一、光るスクリーンを前に、目を見開き、耳をそばだてながら、次第に僕は、その世界にどっぷりと没入していった。

とじとめなく続くかと思われた、山下さんと街山さんの話は、唐突に終わった。

映像が、ブツコと切れるよひこ、終わったからだ。

「フィルムはこれで、全部終わりだ」

「ええ。色情会館の最終上映作品として、申し分無かつた……て、ちよつと有ちゃん、有ちゃんが大変よー」

性と死が交錯する世界の、あまりにあつけない幕引きに、突如として置き去りにされた僕は、明かりの消えたスクリーンを見つめたまま、魂が抜けたように呆然としていた。

「モロ見えの毒にやられたな。山下、有を外に連れ出して、風にさらすんだ」

「有ちゃん有ちゃん、頭冷やそー！」

おぼつかない足元でよろめく僕は、映写室から駆け付けてきた二人に肩を貸しながら、一緒に外へ出た。

夜風が心地良い。辺りは、すっかり夜になっていた。

僕たちが出てきた建物の屋上では、電飾の消えた『色情会館』の

看板が、月に照らされてぼづつと光っている。

僕は山下さんに介抱されながら、まだどこかぼんやりした意識のまま、その看板を見上げていた。

「しかしあま、館長の秘蔵もの、さすがの出来だったわ。館長ったら、ダテに年間千本、エロスなムービー見てたわけじゃなかつたのね」

「ああ。変態が一周まわると、ストレートに無修正でくるんだな」

街山さんはそう、冗談めかして言つと、山下さんと顔を合わせ、そして一人で晴れやかに笑つた。

そんな、まつたく呑気に思える一人が、さつきまでの暗闇で語られ、スクリーンに上映されていた出来事と、あまりに不釣り合いだつたので、そのミスマッチさが可笑しくなり、緊張の緩んだ僕も、一緒になつて笑つた。

僕たち三人は、声を揃えて、底が抜けたように笑つっていた。その笑い声は、終わつてしまつたものたちへのはなむけのように、夜空に高く響き、闇に吸い込まれていった。

固く締め付けていた理性のボルトが外れ、さんざん笑つてお腹がよじれそつになつている僕に向かつて、山下さんがふと、尋ねてきた。

「有ちゃん、明日だけ？　おばさまがお迎えに来るのは

僕がうなずくと、山下さんは街山さんと、『私たちももう、行か

なきやね』と、目線で短い会話を交わした。

それが、色欲の世界に生きる一人と、平凡な日常の世界に旅立つ僕との、一生の別れになる』と、言葉でなくとも遠回して伝わってく。

『ここに、わざやかな終わりが、訪れようとしている。そして二人のゲイは、別れの作法をしつかりと、心得ていた。

「有ちゃん、おばさまのところでは、そのムツツリストスケベを直しながらね！」

「館長の墓に線香や、みりは、俺たちが手厚くやるから、後のことは気にするな」

『そう言って、山下さんと街山さんは、お別れこと、僕に小さな包みを一つ、手渡してくれた。

「それじゃな、有。あまり、おかしな趣味にはまるなよ

「有ちゃん、私のスペシャルお別れハグハグよ！」

鼻息の荒い山下さんは、僕をきつく抱きしめた。体臭もきつかった。

手を振り、去っていく一人の姿を、夜の中につつかりワープアウトされていくまで見送った僕の元には、贈られた包みと、長い間、抱き続けていたわだかまりの解けた心が、残されていた。

言えないうまに過ぎてしまった、さよならの響きがなごる気持

ちで、小さな包みを解いてみる。

するとそこには、リボンをかけられた、金色に輝く新品のペニス
リングが現れた。

月明かりの下、ぽつねんと立つ僕の手のひらで、一人がくれた金色の輪が、いかがわしいくせに、やたら堂々と光る姿に、僕はまた、可笑しさがわいてきて、一人、自然と顔がほころんでいた。

そして、僕は再び、色情会館へと戻つてゆく。

終演を迎えた、この小さな映画館と、色情の世界を求める旅路で逝つた、一人の人間のことを、しつかりと胸に刻むために。

scene 6 (後書き)

作品中の人名は、全て架空のものであり、実在される方とは一切の関係の無いことを、固くおことわりさせていただきます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5548d/>

色情の息子

2010年10月17日10時02分発行